

小川正恭先生を偲ぶ—親族研究への熱き思いとその軌跡

Remembering Professor Emeritus Masayasu Ogawa:
Passion and Trajectory for His Kinship Study

河 合 利 光*

Toshimitsu KAWAI*

小川正恭先生の訃報が届いたのは、今年（2023年）に入ってからでした。今ここに、改めてご生前のお姿を偲びつつ、ありし日の先生の軌跡を振り返ることで、哀悼の意を捧げたいと思います。なお、ここでは小川さん（以下、ご生前に使いなれていた呼称に変更します）のライフワークであった社会人類学の家族・親族（以下「親族」と記す）の研究を中心に進めますが、社会構造論、文化進化論、台湾研究などにも関心をもたれていたことを、予め申し添えておきます。

私は、東横線の沿線にあった旧東京都立大学大学院（社会人類学専攻）に入学する前に、ある先生からお名前は伺っていましたので、早々にお会いしました。しかしその当時の確かな記憶は、あまりありません。私が修士課程に入学した頃には、すでにこの専攻の最年長の学生の一人であり、おそらくお話できる機会も限られていたからでしょう。ただし、私が入学してまもなく結婚され、新居を茅ヶ崎市に移されましたが、その際、引越しの手伝いを依頼され、当日その場にいられた小川さんのご家族にお会いしたことは、よく覚えています。

当時の小川さんは、私が当研究科に入学する以前から、それまで日本には紹介されていなかった欧米の親族研究の最新の理論を、次々と紹介し始めていました（1971, 1972 他）。それも、原書が刊行されると、翌年には

* 園田学園女子大学名誉教授

紹介・論評するという素早さです。

また、当初から控え目で優しい紳士的な方でしたが、その印象は、その後ほとんど変わりませんでした。しかし、学問的には、気骨のある情熱的な面もありました。

たとえば、1974年には、同研究科の助手となり、同時に学会誌『民族學研究』（現在の『文化人類学』）の編集委員の一人でもありましたが、その39巻3号に、出版されたばかりの概説書、吉田禎吾・蒲生正男（編）『社会人類学』の書評を投稿しています。そこでは、日本人研究者の手になる、これまでにないすぐれた入門書として評価する一方、細部にわたり各章の難点を（辛辣にも見えるほど）厳しく指摘しています。それに対して、翌年の同誌40巻1号の「短信」欄で、その概説書の「親族」の章を執筆した長嶋信弘氏から、自身の出自概念の理解について応答があり、また、末成道夫氏が、それまで不統一であった親族に関する学術用語の訳語の検討の必要性を指摘すると共に、その後の多様な議論の討論の場として、同誌の通信欄を活用するよう提案しています。

もちろん、書評であれば、厳しい批評も出てくるのは当然のことですが、注目したいのは、ここにお名前を挙げた方々のうち、吉田・長嶋・末成・小川の各氏が当時の編集委員であり、その通信欄での座談会やディベートの場の必要性を提案して学会の活性化を促すという、編集委員の総意を前提としていたことです。小川さんがその火付け役となったのは、親族研究を含む新たな社会人類学への期待を、そこで訴える意図があったと推察されます。

実際、その書評が同誌に掲載されたのと同じ年に、「親族研究メモ」（小川1974）の末尾に、「ここ10年位で親族体系の研究が新たな飛躍的發展があるとすれば、親族研究に関心をもつ私は、現状の理解の程度ではいけないと自戒させられている」と記しています。また、その熱意はさらに、親族の「系譜調査法」を提唱して後世のフィールドワークの調査法に大きな影響を与えたりヴァーズの著書『親族と社会組織』（小川1978）の翻訳

にも通じます。私どもがこの研究科に入学した当時は、欧米諸国の文献紹介を通して、日本の人類学が、新たな方向に移行する転換期であったと見ることもできます。

少し前に戻りますが、大学院に入りたての頃に受講した村武精一教授の授業では、まだ翻訳書のなかったニーダムの“*Structure and Sentiment*”がテキストでした。その後、それが契機となり、同期の笠原政治、大塚和夫（故人）両氏と、親族論などを含む私的な主要英文論文の講演会を始めました。後の論集『家族と親族—社会人類学論集』（村武 1981）の出版は、それが昂じた結果でした。ただし私どもはまだ院生であったこともあり、翻訳には当時助手をされていた小川さん等にご参加いただき、さらに村武先生からは、出版社の紹介、編者、及び総合解説の執筆を、ご快受いただきました。

その本の原稿がほぼ完成した頃、小川さんはキージングの“*Kinship and Social Structure*”（Keesing 1975）の翻訳を提案してきました。先にふれたように、親族研究の新たな動向の吸収に機敏な方でしたが、私たちがその存在を知る前に、すでに米国で出版された翌年の研究室の紀要に、その論評を投稿していました。結局それは、都合のつく小川、笠原、河合の3人で『親族集団と社会構造』として翻訳し、先に出版された社会人類学論集の翌年に刊行されました。これも小川さんの熱意の結果と言えます。

現在では、こうした翻訳・論評の仕事を、軽視する向きもあるかもしれませんが。けれども、特に日本へ新たに導入された米国風の社会文化人類学の専攻コースの設立も、第二次大戦後まもなく（1950年代初頭）のことであったことを考えれば、先にみた専門用語の訳語の統一が試行錯誤の状態であったように、それは緊急の課題であったと考えられます。同じことが大学での人類学の講義についても言えます。実際、1960年代に大学で学び始めた小川さんが、先に紹介した『民族学研究』の1975年40巻1号の通信欄で、初めて人類学に接する学生たちに異文化を理解させるための、「スライド民族誌」の試みについて提案しているのは納得がいきます。戦後の日本では、海外調査にまだ制約があり、その頃は、異文化に関する

自前のデータどころか、一般教養向けのテキストや映像機器すら充分でなかったことを、それは示しています。

もちろん、1970年前後から海外調査も活発になり、レヴィ＝ストロースの親族と婚姻交換論を含む構造主義の流行もあって、日本人による優れた研究書や論文も増えていきます。しかし小川さんの親族研究が、先駆的で重要な影響を与えたことは明らかです。

ここで少々話は変わりますが、小川さんは1977年から武蔵大学の人文学部社会学科に助教授として勤められることになりました。さらにその翌年、小川さんから、同大学の社会学科で、比較社会学と基礎演習の2科目を担当してほしいという要請がありました。

詳細は省略しますが、武蔵大学社会学科には、学生主体の社会人類学研究会があり、小川さんと共に時々参加させていただきました。ここには、学年の枠を超えた活発な交流と知的活動や、勉学への意欲の感じられる充実した学びの場がありました。研究だけでなく教育にも熱心であった小川さんでしたから、それもその一環でもあったように思われます。

私のその3年間で特に心に残るのは、当時日本一小さな村として知られていた愛知県の富山村（現豊根町）における小川さんや学生たちとの共同



民宿での集合写真。小川先生は、後ろから2列目左中央。愛知県の富山村（現豊根村）にて。写真右は、退職記念講演会当日に撮影（2012年3月3日）。

調査です。この村は長野県と静岡県との県境に位置し、ダム建設で半分が湖底に沈んだ神道のみで、適切なフィールドと判断しました。この調査計画は私が提案しましたが、その参加者の主体も小川さんの親しい研究会の学生たちであり、最終的には皆さんのご協力により、まとめていただきました。その調査からまもなくして、私は関西にある大学に赴任することになりました。その頃は、住居を川崎市から伊勢原市に移していましたが、出発の際に、小川さんと笠原さんが、わざわざ小宅まで見送りに来て下さいました。

当然ながらその後も、学会の研究大会、海外調査や共同研究など、さまざまな機会にお会いする機会がありました。けれども、ここでは詳述を控え、私と共に参加したプロジェクトを、いくつか挙げるに留めます。

まず文科省科学研究費補助金（科研）による海外学術調査ですが、小川さんは山路勝彦さん（現関西学院大学名誉教授）を代表者とする「産育慣行よりみた西オーストロネシア諸民族の生命観の社会人類的研究」の第2次調査（1987年度）に参加しました。このプロジェクトは、東南アジア・オセアニア諸国が主な舞台でしたが、小川さんは、台湾高地に住む一民族、ツォウの「家」を中心に調査しています。その成果は、第1次調査と合わせて編集し、台湾の出版社から英文論文集として刊行されました（Yamaji ed. 1990、ちなみに同書は Strathern and Stewart 2011 において、近年の研究動向のひとつとして紹介されています）。

もう一つの科研調査は、河合自身が代表となって計画した「オセアニア南部首長制諸社会の持続と変容に関する文化認識論的研究」（1995-1996年度）です。これは、グローバル化や伝統の変貌の進んだ太平洋諸国において、変化した自国の社会文化を現地の人々がいかに納得して捉えているかを調査することで、その持続と変容を住民の視点から描き出す試みでした。成果は、英文報告書に新たな地域も加えて改編し、後に『オセアニアの現在—持続と変容の民族誌』と題して公刊されました。そこで小川さんは、自身の調査地であるフィジー東部のラウ諸島で首長家の系譜の歴史的

構築性について考察しています(小川 2002)。フィジーで、別個に調査した小川さんや石井真夫さん(故人、当時三重大学教授)と首都のスバに集まり、打ち合わせと懇親会を兼ねて集まった頃のこと、今も懐しく思い出されます。

ところで、先に紹介した小川さんの親族研究への思いとは逆に、特に1980年代以降に入ると、欧米の人類学の家族・親族論は急速に存在感が薄くなっていきます。これには多くの理由がありますが、その一つは、かつて比較的小規模な社会の研究が主流であった人類学の「親族組織が社会組織の基礎」という見方の前提が、都市化・グローバル化・産業化の影響で崩れていったことです。もちろんこの見解も実際にはかなり一面的ですが、ともあれ、研究者の関心もテーマも多様化し、自国を含む近代的な社会文化の研究へと関心が広がって行きました。小川さんが論文「親族論の消滅はあったのか—日本の教科書の記述から」(小川 2008)を武蔵大学の紀要に寄稿したのは、こうした流れに危機感をもたれたからです。

間接的にですが、小川さんから研究会開催の意向を聞いたのは、それからまもなくのことです。これは私自身の関心事でもありましたから、勤務先大学に共同研究費を申請し、「生命観よりみた家族・親族の社会人類学的研究」(2009-20011年度)を企画しました。内部からだけでなく外部からも、関心を持ち続け研究実績のある研究者を招いて、合計8人で3年間続け、各自の立場から、とりあえず概説的な形で公にしました。小川さんには、先に述べた武蔵大学の紀要論文を基に、発展的にまとめていただきました(小川 2012)。

その2012年3月の最後の研究会は、小川さんの退職記念パーティが開催される時期と重なり、東京在住のメンバーも他にいたため、その春に出版予定の原稿の最後の詰めを兼ねて、武蔵大学の小川さんの研究室で行うことにしました。小川さんには、記念講演「社会学のなかの人類学」と記念パーティが控えていましたが、時間が許す限り同席し、早めに会場に向かいました。私たちも参加しましたが、これが小川さんと直接お会いする

最後となりました。

それ以後「もう一度、研究会を」との声もあり、自身もまだやり残し感が拭えませんでした。親族研究再興の動きは、欧米の社会（文化）人類学界では、すでに1990年代からありました。グローバル化により変化し多様化した現代社会にまで関心が広がったのは、もちろん望ましいことです。しかし欧米諸国からは、それが伝統の放棄と親族関係の消滅を意味するわけではないという主張が、その頃から興ります。さらに、私たちが研究会を開始した2000年代後半には、存在論的親族論へのパラダイム転換を唱える議論がむしろ目立ち始めます。

社会文化人類学が人間理解を目的とする総合科学であるとしたら、少なくとも、フィールドで調査する民族誌的研究では、産業社会を含むいかなる社会でも、親族論的課題こそ日常世界に「生きる」人々の生存や存在（ライフ）に深く関わる基礎的なテーマと言えるでしょう。たとえば先述の科研調査の主題であった産育や文化認識で言えば、それは具体的には結婚と出産、子供の教育と成長、衣食住、医療、福祉、政治経済、宗教儀礼など、日常生活全体に深い関わりがあります。現地に生きる人々の立ち位置から、それらの個々の文脈において総合的に探究する親族研究は、小川さん自身の求める今後の中心課題であったはずです。

しかし、私的な事情から研究会開催の時間的な余裕もなくなり、お会いできるはずの機会にも会えなくなりました。2021年4月に、出版されたばかりの小著（編著）を小川さんに謹呈したところ、礼状の末尾に、「私も何とかやっています。出歩くのに不便を感じていますが、もう一度お会いしたいですね」と書かれていました。まだコロナ禍の最中で、その年はお会いするのが憚られましたので、終息が予想される今年の秋まで延期していました。しかし、冒頭でも述べましたように、今年に入って訃報に接し、1年先延ばしにしたことが悔まれます。

こうして振り返ってみますと、小川さんとは、私的にも学問的にも出会いと別れを何度も繰り返し、さまざまなご助言やご協力をいただきました。

小川さんの教育研究の軌跡は、ある面で、私自身の歩みでもありました。フィジー人の言葉では、別れの挨拶を「モゼ（お休み!）」と言いますが、これまでの長い間のご交友に心から感謝し、ここに「安らかにお休みください」と申し上げて、稿を閉じさせていただきます。

合掌

主要参考文献

小川正恭

- 1971 「キンドレッドの類型」『社』第IV巻第1・2号, pp. 31-38
- 1972 「(論評) Rodney Needham (ed.): *Rethinking Kinship and Marriage*」『社』第V巻第3-4, 55-64 頁
- 1974 「(書評) 吉田禎吾・蒲生正男(編)『社会人類学』(有斐閣双書)』『民族学研究』第39巻3号, 273-274 頁
- 1974 「親族研究メモ」『社会人類学研究会報』9号, 9-10 頁
- 2002 「首長国としてのラウーフージー東部諸島における首長制の伝統と変化」河合利光(編)『オセアニアの現在－持続と変容の民族誌』人文書院
- 2008 「親族研究の消滅はあったのか－日本の教科書の記述から」『ソシオロジスト』10(1) 51-72 頁, 武蔵社会学論集
- 2012 「親族論の後退と復活－日本の事情」河合利光(編)『家族と生命継承－文化人類学的研究の現在』時潮社

村武精一編

1981 (新装版 1992) 『家族と親族－社会人類学論集』小川正恭他(訳), 未来社リヴァーズ, W.H.R

1978 『親族と社会組織』小川正恭(訳), 弘文堂

Strathern, Andrew and Pamela J. Stewart

2011, *Kinship in Action: Self and Group*. Prentice Hall.

Keesing, Roger. M.

1975, *Kinship and Social Structure*(R.M. キーピング『親族集団と社会構造』小川正恭・笠原政治・河合利光(訳), 1982, 未来社).

Yamaji, Katsuhiko

1990, *Kinship, Gender and the Cosmic World: Ethnographies of Birth Customs in Taiwan, and Indonesia*. Taipei: SMC Publishing Inc.